

我らのアイドル『青木美香』さん

昭和基地でも、国内同様、各所にカレンダーが掛けられている。

仕事場、食堂、居住棟サロン、通路等に掛かっているそれらは、絵もなく書き込み可能な日付だけのもの、風景、動植物、美術品など写真もの、有名画家の絵もの等々で構成された、ごくごく普通のカレンダーが多く、その利用目的は日付と曜日の確認にある。

ところが、隊員の各個室にあるそれは、そのほとんどが女性の写真入りカレンダーであり、しかもその女性は、お気に入りの女優であったり女性歌手だったり、隊員それぞれが秘めるアイドルである。

また、トイレに張られるそれは、必ずや月遅れの女性カレンダーであり、ともすると、それを気に入らなかった誰かの仕業によって、3～4日で張り替えられることも度々であった。

男だけの越冬生活という社会の中では、アイドルは欠かせない存在である。隊共通のアイドルの話が持ち上がったのは、越冬開始（2月20日：公式の）後すぐのことで、10次隊のアイドルとして「青木美香」さんが満場一致で決まり、3月28日には『南極青木美香後援会』（初代会長：小元久仁夫隊員）が発足した。

日本短波放送では、南極観測が新造の観測船“ふじ”によって再開された第7次隊（1965年～1967年）以降、“ふじ”がオーストラリアを出港（12月中旬）してから日本に帰港（4月上旬）するまでの約4ヶ月間、南極向けに『お元気ですか“ふじ”のみなさん』という番組を、昭和基地時間の18時から30分間放送していた。この番組を担当していたのが「青木美香」さんである。

番組内容は、世相・芸能・スポーツ等ニュース性のもの、俳優・落語家・歌手等の生の話、映画の紹介、リクエスト曲、また、年の瀬の街頭の雰囲気や録音したもの、新年を迎えつつある大晦日の実況等々多種多様で、この番組は、沈まぬ太陽のもとで基地建設作業に追われる隊員・乗組員の心を和ませてくれた。

中でも、隊員・乗組員の留守家族の声の放送では、透き通るような美香さんの声と共に、もしや自分の家族の声が聞けるんじゃないか、と耳を傾



青木美香さん（1968年頃？）
プロマイド写真を
S10-P編集部が複写

けたものである。しかし、時として電波伝搬状態が悪くてその声がかすれてしまう事もあったが、声が聞けたという事だけでの隊員の笑顔には、遠く離れた南極から故郷を思う安堵感が滲み出ていた。美香さんの話によれば、留守家族の声の録音には、ディレクターと共にデンスケを担いで東京近郊の留守宅に伺う、という並々ならぬ苦労があったということである。

一般的に、アイドルと言えば一方通行であるが、我々のアイドルは、電報による意思の伝達出来る間柄となった。まず、後援会からと称して美香さんの身上調査？を始めた。

当時の彼女の告白？によれば、「本名は寿美、樺太生まれ。幼少の頃は山形や北海道にいたこともあるが、今は東京上野。呉服屋の一人娘。医者志望だったが血に弱かったので諦め、たくさんの習い事をして花嫁さんになりたかったが、これも事情が許さず駄目だった。あるプロダクションに所属していて、これまでに映画に十数本出演し、テレビにも出演している。」とのことであった。

後援会活動も熱を増し、日常生活の中でも、会長に対する批判や要望、会誌の発行、会の運営方法等で話が絶えることがなかったし、ある隊員が独断で恋心？を送ったのではないかと揉めた事もあった。これらの経緯は、10次隊の日刊新聞「S .10トピックス」の記事の一部からも読み取ることが出来る。

我々10次隊は、帰国後、数年おき（近年は毎年）に「家族会」または「S .10〇〇年次総会」あるいは「隊長〇〇記念会」と称した家族同伴の会を、幹事持ち回りで北は北海道から西は山陰の全国各地で開催してきた。東京近郊での開催の折には、美香さんもお出席頂いており、集まった面々は、美香さんの当時と変わらぬその華麗さとスタイルの良さに、羨望の眼差しを送っている。彼女曰く、

「私、『インド・ヨガ』のインストラクターをしていますのヨ...。」

今までの観測隊のいくつかにも、その隊としてのアイドル（女優さんが多い）の存在があり、10次隊の他にも、隊員集合の時などにそのアイドルをお呼びし、親交を続けている隊があると聞いている。

青木美香【ヨガ】のホームページ

<http://tokyo-nakano.genki365.net/gnkn02/mypage/index.php?gid=G0000215>